継　承

≪舞　鶴　山≫

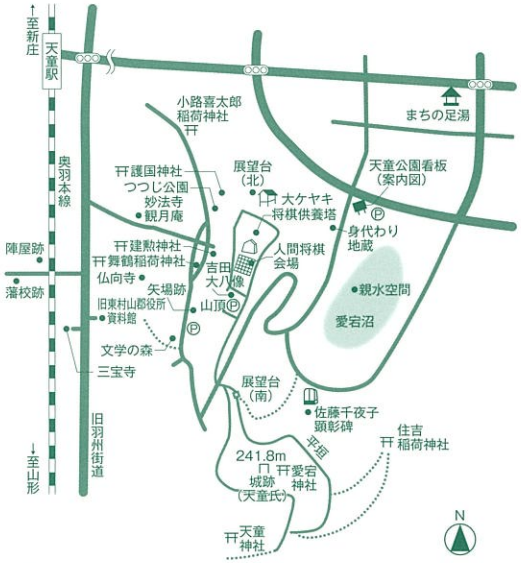
歴史と自然の宝の山として親しまれている。花見スポットでもあり、4月は桜、5月はつつじ、夏は、彼岸花、秋は、もみじが美しい。

西側の**建勲神社**は織田信長を祭神としている。**護国神社**は、自刃し果てた吉田大八を祀った神社。中には人形師・神保平五郎の作った吉田大八の木像が納められている。

旧東村山郡役所資料館

東村山郡の役所として明治12年10月に完成した建物。明治時代の洋風建築として山形県有形文化財指定。現在は、資料館として、「幕末の天童織田藩」や「天童と戊辰戦争」、「天童の政治や文化の発展」などを展示している。

天童織田家や吉田大八が実際に使用していた品々も展示。



維新軍楽隊

戊辰戦争の時、吉田大八が藩主に代わり奥羽鎮撫軍を先導した。この時軍楽隊が演奏したのが「維新軍学」である。もともと軍楽隊は藩士の士気を鼓舞するために編成されたと言われている。天童織田藩軍楽隊は解散したが、元織田藩士の人たちによって再編された。その後、維新軍楽は継承者が少なくなったが、維新軍楽保存会から依頼され、織田藩御陣屋跡地に開校する南部小学校の郷土芸能クラブの活動として継承されている。

═ 食 ═

○将軍家献上寒中挽き抜きそば

江戸時代末期、織田信長公の子孫で、第十一代藩主織田兵部少輔信学が、特産品の「そば」を、東北・北海道地方で唯一将軍家に献上したのが「寒中挽き抜きそば」であると「大成武鑑時献上」に記されている。麺類食堂組合は、文献に基づき研究し当時の製法を忠実に再現して、平成16年1月から、賞味会を開催。冬の寒い時期に各お店でも提供している。

○天童織田藩　大八鍋

平成鍋合戦®を主催する天童商工会議所青年部が、郷土の名物にしようと開発した鍋料理。吉田大八にちなんで「大八鍋」と命名した。原崎沼の鴨のつみれ、天童産大吟醸酒粕や野菜などをふんだんに使った鍋。

鍋合戦の出陣の前には、大八公をお参りし、神社に奉納を行っている。

○織田めし

観光PRのために魅力ある天童オリジナルの食事を提供できないかと考案されたもの。「天童観光女士会」が考案したメニューが、平成27年6月信長公祭で発表された。織田信長が好んで食べた湯漬けと味噌を基本に、カツや地元食材の紅花若菜、おみ漬など加えた。「織田めし」が街の中で食べられるよう今後の広がりが期待されている。

経済と流通を活性化させた信長の精神を今に…

「天童桜まつり」……4月
「人間将棋」……4月
「信長公祭」……5月または6月
「天童夏まつり」……8月
「軽トラ市」
「織ら田の天童 楽市楽座」……10月
「平成鍋合戦」……11月
など

縁結びの若松

「縁」を結んで、愛の天下取り！
若松寺縁結び祈願祭は
4月～12月の
第一日曜日午前10時

発行：天童商工会議所　企画編集：天童商工会議所観光部会　℡023-654-3511　H29.9　第4版　2,000部

天童織田藩
夢の跡を巡る

天童市仲町　三宝寺（さんぼうじ）所蔵
信長肖像画（写真）

天童織田藩は、織田信長の次男　信雄を祖とする織田家直系の藩。石高は、およそ2万3千石、領地村山地方（村山郡）21カ村。陣屋を天童に移転してから織田藩の終焉までわずか40年。しかしその短い期間は、日本の激動の時代。織田藩は天童の歴史に大きな足跡を残した。

経済人文化人としての評価も高かった信長、能や茶人として才能を発揮した信雄。そして江戸後期の天童織田藩は窮乏にあえぎながらも、多くの教養人を輩出した。織田の文化と精神は今も受け継がれている。

歴　史

はじまり

天童織田藩は、織田信長の次男・信雄を藩祖とする。信長の死後、信雄の四男により上野国小幡藩（現・群馬県甘楽町小幡）が創始されたが、「明和事件」に関連して出羽国高畠に移封された。

その後、1831年藩主が高畠から天童に入部して天童織田藩が誕生。

史　跡

≪建勲神社≫ ※通称：けんくんじんじゃ

天童藩知事の織田信敏（元14代藩主）が信長を祭神として、東京に「織田社」を造り祀っていた。

明治２年（1869年）に神祇官より「健織田社」（たけしおりたのやしろ）という神号が下賜された。明治３年（1870年）に天童市の城山（現　舞鶴山）山頂に社殿が建造された。明治17年に現在地に移転。

≪三宝寺≫

1830年に天童織田藩は、織田宗家の菩提寺として三宝寺に織田家御霊屋（御位牌堂）を造り、織田信長の位牌をはじめ、織田家歴代藩主の位牌を納めた。御霊屋の正面には織田信長の肖像画が飾られている。

≪妙法寺≫

家老吉田大八が自害した“観月庵”がある。潜伏していた大八は、自首して天童藩に引き渡されて観月庵で切腹した。その時、大八の血が観月庵の天井を血で染めたと伝えられる。遺品や資料を展示している。

≪仏向寺≫

吉田大八が埋葬されている。仏向寺の墓碑銘は、先導役代理として出発するに当たって自筆し、これで墓を造るよう依頼したもの。大八の覚悟と苦しい心情がうかがわれる。

家系図

織田 信秀
- 信長
  - 信忠 — 秀信
  - 信雄（①のぶかつ（のぶお））
    - 信良（②のぶよし）
      - 信昌（③のぶまさ）
        - 信久（④のぶひさ）
          - 信就（⑤のぶなり）
            - 信右（⑥のぶすけ）
              - 信富（⑦のぶとみ）
                - 信邦（⑧のぶくに）
                - 信浮（⑨のぶちか）
                - 信美（⑩のぶかず）
                - 信学（⑪のぶみち）
                - 信敏（⑫のぶとし）
                - 寿重丸（⑬すえまる）
                - 信敏（⑭のぶとし）（再）
    - 高長（大和・松山藩 — 丹波・柏原藩）
  - 信孝
  - 秀勝
  - 長政（大和・芝村藩）
  - 尚長（大和・柳本藩）
- 信包
- 信行
- 長益（有楽斎）
- 女子

小幡藩 → 高畠藩 → 天童藩 → 廃藩置県へ

≪終　焉≫

戊辰戦争では、織田藩主が官軍により奥羽鎮撫先導役を命ぜられ、家老　吉田大八が名代としてこの役を担った。

そこから天童織田藩の悲劇がはじまる。奥羽列藩同盟と対峙することになった天童織田藩は、庄内藩の攻撃を受け、戦火に巻き込まれる。その戦争に敗れた天童藩は、奥羽越列藩同盟に加盟。すべての責任をとって、吉田大八は観月庵で切腹。その後明治を迎え廃藩置県となり、藩は終焉した。

藩校　養正館の学訓

一日の計は鶏鳴にあり、
鶏鳴に起きざれば、一日空し。
一年の計は陽春にあり、
陽春に耕さざれば、秋実らず。
一期の計は幼稚にあり、
幼稚に学ばざれば、老いて後悔やむ。

＝ 天童の八重さん ＝

織田領荒谷村の大庄屋、村形家の娘、八重は11代藩主の側室となり、13代藩主となる寿重丸を生んだ。産後は、戦火を逃れて実家に戻り、失意のなか命を落とした。墓は、三宝寺にある。

八重の実家であり、織田家に仕えた荒谷の村形家では、織田家に仕えた先祖を偲んで信長の銅像を建立した。

大名小路、現在の丸ビル近くにあった織田藩の江戸藩邸

文　化

≪天童広重≫

天童織田藩は、窮迫した藩の財政対策の一環として歌川広重（1797～1858）に多くの肉筆画を依頼した。その数200～300幅と言われている。広重晩年の円熟期に描かれたこれらの作品群は、「天童広重」として高く評価されている。最近も新たに市に戻った肉筆画が話題となった。

広重と天童の縁にちなんで、生誕200年にあたる平成９年４月、広重美術館が誕生し、広重の作品を観賞することができる。

≪織田藩の人物≫

【吉田大八】

天童織田藩家老　勤皇の志士

天保３年（1832年）、江戸天童藩邸に生まれる。15歳で父の跡を継ぎ、要職を経て中老。江戸では安積艮斎に就いて儒学を学んだ。天童では、藩財政の立て直しに取り組む。戦争の中、桂太郎と出会い、その才を見込まれたと言われる。奥羽列藩同盟が成立するにおよんで、藩の責任を負い、明治元年６月（1868年）切腹した。享年37歳。

【宮城浩蔵】

明治法学校（現、明治大学）の創始者のひとり

嘉永５年（1852年）天童藩御典医の次男として生まれた。戊辰戦争では、吉田大八の直属の部下として転戦。のちに法治国家を目指し法学校を興した。吉田大八を師と仰ぎ、その影響を受けたと言われている。

【安達鏡子】

国際司法裁判所長　安達峰一郎夫人

織田藩士の高沢佐徳長女。明治３年生まれ。「世界の良心」と言われた安達峰一郎を内助の功で支えた。

夫亡き後は、国際法研究の後継者育成に尽力。宮事にも仕え、大正天皇皇后からの信頼も厚かった。

≪将棋駒≫

天童は、全国の大部分の将棋駒を生産する将棋駒のまち。これは、天童織田藩の下級武士の生活の足しにと内職させた駒つくりが発祥。

家老の吉田大八は、「将棋は戦法を鍛えるもので、駒つくりは武士の面目を傷つけるものではない」としてこれを奨励したという。

信長も、将棋・碁を好み、大橋宗慶に将棋を学んだ。大橋宗慶は、「桂馬の使い方が巧妙」と信長の言葉で桂の一字をもらい、宗桂と改めた。

＝ 織田の茶道 ＝

織田藩と茶は深い縁にある。茶の湯を愛した信長。織田信長の実弟織田長益（有楽斎）は「茶道有楽」の宗匠。天童織田藩祖 信雄も有楽斎に茶を学んだと言われている。

有楽斎は、晩年、建仁寺に入り、茶道の最高峰とも言われる如庵（国宝）を建立し、大名武家茶道の祖とも言われている。

≪紅　花≫

芭蕉が、「まゆはきを俤にして紅粉の花」と句を残したように、天童は最上紅花の一大産地であった。紅花商人が帰りの船に雛人形などを積んできてこの地に華やかな京・江戸文化をもたらしたと言われている。天童織田藩では、財政政策の一環として紅花の専売をはじめた。